

結 章 日本体育大学女子短期大学の課題と展望

　　↓結びにかえて↓

学校法人日本体育会は、昭和二十八年四月、女子のための短期大学を開設し、女子の高等教育進学の受け皿を用意した。この短期大学の設置はその名称が物語るように日本体育大学に併設することなしには実現することはなかったといえる。日本体育大学は体育を専門とする一つの学部からなる単科大学であるために、入学定員の増員には限界があった。しかし、短期大学をこの単科大学に併設させ、教育職員や事務職員を兼務させ、施設を共用とすれば実質的に定員増を見込めることにつながるわけである。無論、この短期大学に幼児教育のエキスパートを育成しようとの計画のもとで保育科が増設されたことにみられるように、経営のためにのみ短期大学が設置され、運営されてきたとみることは避けねばなるまい。したがって、ここでは日本体育大学女子短期大学が日本体育大学短期大学部として運営されてきたという事実を指摘しておくことに留めておくことにしたい。

しかし、このことは将来においても体育大学の一学部に甘んじてよいことを意味しない。確かに、女子があらゆるスポーツに長け、スポーツを教養として身に付ける時代がそこまでやってきているといわねばならない。しかし、このキャンパスでの生活が人生を豊かにすることだけでなく、女子の職業生活と結びつくようであれば多くの若き女性の支持を得ることは難しいであろう。僅か二年間という期間で得られたスポーツに関する知識や技術では到底、スポーツを職業としていくには無理があると思われるからである。したがって、別の方向に目を転じて、女性の職業生活を射程においた改組・転換を考えるのも今後の本学の重要な課題となろう。新学科、新学部、新大

学をつくるときのキーワードとして「国際」「情報」が持て囃され、最近では「政策」もトレンドとなった。その
いずれが、本学の将来にとって有益であるかはもとより定かではないが、二十一世紀においても力強く羽ばたこう
とするなら、ここで思い切った改組・転換を図るのもひとつの方策であるといえそうである。東京二十三区内に本
学のキャンパスがあるという地の利を生かし、通学圏内に抱えている十八歳人口を積極的に取り込む努力がなされ
ねばならない。